

## 大相撲初場所観戦感想の記

不祥事の連続、不祥事への関与から二人の横綱が処分を受け、残りの横綱は怪我からの復帰が微妙な状態、大関陣は未だ独り立ち出来ず、かような状態では相撲人気は凋落か？はたまた、次世代を担う若者の達の進出で、注目はここに移っていくのか？

何とも読みようのない、見ている方も不安満載の平成 30 年初場所。

開けてみると、5 日目から白鵬が休場、6 日目からは稀勢の里も休場で、今場所に進退を賭けるというキャッチフレーズ付の横綱がただ一人。

そして 15 日終って見れば、栃ノ心が平幕優勝でしかも 14 日目に決定、殊勲賞・技能賞は栃ノ心、敢闘賞は新入幕の阿炎と竜電という結末。目についた力士の、目についたところを思いつくまに・・・。



栃ノ心の相撲は前半戦から力強く光っていた。右四つが得意ではあるが、右でも左でも回しを引きさえすれば、強い引きつけで相手を浮き上がらせる力を持っている。幕下まで陥落することになった膝の怪我からの回復で、膝に不安がない状態だった今場所、膝を曲げて重心を低くして前進を続けることで、相手にとっては大変な脅威になった。低い位置でまわしを引く技術を持っており、技能派力士のひとりでもある。14 勝 1 敗での優勝は見事で、来場所は関脇に昇進すると思われる。膝の故障が再発しなければ・・・と心配はあるが、この心配が無用であった場合は更なる地位を狙うことも難しくない。しかし、右膝に爆弾をかかえている状態で、いつうずき出すかわからないが、今場所のような動きが続けられるとしたら、戦国

時代の今、何が起きるかはわからない。(左写真：千秋楽 遠藤の猛攻に反撃開始)

前半戦で 3 敗を喫し、またしても・・・と懸念された高安、後半立て直して、終って見れば 12 勝 3 敗。迷わず自分の進むべき相撲を取り続ければ何のこともない。ふいを突かれると俄に粗雑な相撲になってしまうのが欠点のこの力士、15 日間覇気を持って邁進すれば良だけのことと思うが、如何に。

「大関の地位を守るだけの大関」になるか「横綱を目指せる大関」になるかの分かれ道はここにある。

連続勝ち越し場所数を延ばし続けている御嶽海だが、8 勝 7 敗か 9 勝 6 敗ばかりで今ひとつ光り輝きが不足している。そろそろ大勝ちして存在感を示す頃ではないかと期待して見ていたら、中日まで 7 勝 1 敗。「もしかして・・・」と期待させてくれたが、中日の逸ノ城戦での黒星をきっかけに 5 連敗。

相撲が乱れ始めた鶴竜には勝つことができたが、中日以降で 1 勝しかあげられず別人のような相撲。突き・押し・四つ・土俵際の粘りなどなど何でもこなす器用さがあるために相撲のスタイルに強さが不足しているように感じる。前頭上位に進出し始めた頃のような、「前進あるのみ」の「勝つ相撲」に拘った方が良いと睨んでいる。壁をぶち破ることができるか否かはこのあたりにかかっている。

ここ数場所、新しい力の活躍として注目を浴びてきた貴景勝・阿武咲・北勝富士は、今場所大きな壁に阻まれる結果となった。横綱・大関が居るのか居ないかわからないような場所なので、一人ぐらいは大勝ちする者がいてもおかしくないと思っていたが、4 勝・5 勝しかあげられなかった。とは言ってもこの三力士、いずれも前進相撲で叩いたり引いたりしない正直な相撲が素晴らしい。

貴景勝の間合いを取りながらの突き押し相撲は相手のリズムを狂わせる効果もあり、功を奏してきたが中堅力士達にも覚えられた感じがする。取り組み前後に口を開けて呼吸をしているので、おそらく鼻が

悪いのかもしれない。そのためにつばぜり合いの最中に口の中を切ることが多いし、「気が抜ける」ことで突き押しの威力が半減すると言われている。このあたりが次への飛躍のための課題かもしれない。**阿武咲**は初日から白鵬・豪栄道・御嶽海と続いた初日からの三日間の相撲で黒星を並べてしまったが、相撲内容を見ても、どこことなく精彩を欠いていた。案の定怪我により 10 日目から休場。

東前頭筆頭まで躍進した**北勝富士**は三日目に白鵬を破って破壊力を示したが、この 1 勝の他には 3 勝しかあげられず、4 勝 11 敗に終わった。前傾姿勢を保ちながら執拗に前に進みながら押し上げる相撲が白鵬にも充分通じることがわかっただけでも収穫ありと言えるだろう。

この三人の中から誰かが抜け出して来ることは間違いないと見ているのは、私だけではないだろう。

ここ数場所、前述の三力士に注目が集中しすぎている間にじわじわと壁を乗り越えつつあるのが、大栄翔・千代丸・遠藤・輝・豊山あたりだろうか。

**大栄翔**の押し相撲は実直そのもので、力強さと執念深さを感じる。きちんと相撲を取っている、諦めない姿勢を感じるというのがこの人の相撲の印象。もっと活躍して欲しい。

**千代丸**の巨体を低く構えて、巨腹を利した寄り身は最近の力士の中では珍しい。往年の巨腹横綱鏡里を思い出させてくれる。但し、太りすぎの健康被害の懸念も感じられることを付け加えておきたい。

**遠藤**の「足をほどよく開いた」「低い構えでの攻め」が復活した。今場所は取りこぼしも多々ありはしたが、少しずつ回復して、持ち味通りの相撲が取れるようになってきている。横綱・大関と対戦する地位になると思われる来場所の相撲に期待したい。

長身で腰高だった**輝**が、毎場所少しずつ腰を低くして前傾を保てるようになってきた。かなり意識した前傾姿勢のようにも見えるが、その中で脇を固めてはず押しとおっつけで体を前に運びながら攻めていく形が出来上がってきた。足が長い上に、しかも膝があまり深く曲がらないので重心を低くできないという欠点を、前傾姿勢でカバーしようとしている感じがするが、この先どんな相撲になっていくのか、しばし静観したいと思う。

**豊山**は新入幕以来、負け越して十両へ陥落、十両で大勝ちして再入幕、幕内で負け越してまた陥落を繰り返してきたが、この場所初めて「再入幕の場所で勝ち越し」ができた。これまでエレベーターを繰り返してきた背景には、新入幕直後に痛めた膝の故障も関係している。しかし、それ以上に幕内で通用しにくかった理由として「押し相撲のスタイル」によるものもありそうだ。豊山の押し相撲は、手で相手を押しているときには足が動いていないし、足が前へ進んでいるときには手が働いていない。左右の手を繰り返しながら体全体を前へ前へと運んでいかなければ相手に影響を与えることはできない。今までは恵まれた体格が助けてくれていたが、幕内ではそうはいかない。

新入幕の二人がいずれも 10 勝 5 敗の好成績で敢闘賞を手にした。竜電はきれいな四つ身の相撲で 27 才、阿炎は突き押しをベースとする 23 才と相撲の型も対象的。

**阿炎**は期待の若手としてマスコミ等にも数多く取り上げられているが、相撲は荒削りだし未完成な感じがする。元寺尾が育てた力士で基本的には突き押し相撲ではあるが、やや腰高ながら柔軟な足腰で機敏に対応する相撲に注目が集まっているし、礼儀正しいことも好感の因になっている。

一方の**竜電**は元安芸乃島が育てた力士で、オーソドックスな四つ相撲で両差しになる技術を身につけている。

二人が敢闘賞を受賞したが、今場所の両者の土俵を見た印象では竜電の方が内容のある 10 勝だったように感じた。このところ新入幕で敢闘賞をとる力士が目立って来たが、次世代をうかがう者が次々として出てきていることを意味しており、望ましい傾向だと思う。

余談になるが、「阿炎(あび)」というしこ名はあまり好きではない。「炎」を「ひ」と読ませるのには無理があるし、「阿鼻叫喚」という言葉を想起させる。力士のしこ名には「美しさ」が必要と感じている。

新時代の息吹を感じさせる中で、今場所の栃ノ心の優勝の他に、先場所まで続いていた玉鷲・嘉風の健

闘など 30 才を過ぎた力士の活躍が見られ興味深い場所が続いているのは結構なことである。  
かたや苦勞に苦勞を重ねて幕内に復歸を果たした**安美錦**と、連続して幕内の地位を守り続けてきた**豪風**  
の両ベテラン力士が大きく負け越して十両への陥落が濃厚になった。  
相撲が好きで、まだまだとり続けるとされる両力士を再び幕内の番付で見ることを願うところだが、  
先に記したように、次を狙う若手が続出してきた昨今、かなり嶮しい道のりになるような気もする。

初日の直前に発覚した立行司の不始末、場所が終わった途端に発覚した力士の無免許運転事件と、まだ  
まだ不祥事が底を突かない上に相撲協会理事選挙が又々物議を醸しそうな雰囲気がある。  
混乱の影響を受けてか、「張り手」と「張り差し」の違いや「ぶちかまし」と「かち上げ」の違いなどが  
わからない素人が口を出しすぎて、ただでも混乱に近い状態になっているところへ一層の混乱をもたら  
しているというのがこのところの大相撲。  
早く落ち着いて次世代へのバトンタッチができるようになることを望むばかり。

以上